

6. 京丹後市久美浜町矢田神社 文化財調査（2）—狛犬—

角南 博紀・平田 有香・目黒 力輝・山内 愛弓

1. はじめに

今年度の文化遺産学フィールド実習では、矢田神社が所蔵する2対4点の石造狛犬について、三次元写真計測（SfM/MVS）を用いた調査をおこなった。これらの石造狛犬は過去に京都府立丹後郷土資料館で展示されているが、正面からの写真とともに簡単な概要と法量が掲載されているのみであった（京都府立丹後郷土資料館編 1974）。今回精密な観察と三次元写真計測（SfM/MVS）をおこなったことで個々の石造狛犬の造形や細部の表現を確認し、石造狛犬同士の比較や年代の位置づけをおこなうことができた。本章では、その調査成果について報告する。（山内愛弓）

2. 矢田神社石造狛犬の三次元写真計測（SfM/MVS）

（1）計測方法

SfM/MVS とは Structure from Motion/Multi View Stereo の略称であり、その手法はデジタルカメラによって撮影した写真を専用の解析ソフトで分析することによって対象の3Dモデルを作成するというものである。撮影機材と設定は下記の通りである。

Panasonic 社製 DC-GX7MK3

- ・露出プログラム シャッター優先
- ・ISO 速度 ISO-1600
- ・焦点距離 12mm

Sony 社製 NEX-6

- ・露出プログラム シャッター優先
- ・ISO 速度 ISO-1600
- ・焦点距離 16mm

（2）計測作業・計測結果

日 時 2024 年（令和 6）8 月 9 日（金） 9：30-12：00

場 所 矢田神社拝殿

調査者 山内愛弓（博士前期課程）、芝田祐希、角南博紀、田又春哉、平田有香、目黒力輝（以上 2 回生）

矢田神社の石造狛犬 2 対を、2 グループに分かれ同時並行で計測した。1 対目の狛犬の阿形を①（図 1）、吽形を②（図 2）とし、A グループ（田又・角南）が計測した。また、2



図1 矢田神社石造狛犬①



図2 矢田神社石造狛犬②



図3 矢田神社石造狛犬③



図4 矢田神社石造狛犬④

対目の阿形を③（図3）、吽形を④（図4）とし、Bグループ（芝田・平田）が計測をおこなった。各狛犬の細部の観察は目黒がおこなった。AグループがPanasonic社製のカメラDC-GX7MK3を、BグループがSony社製のカメラNEX-6を使用した。

計測は矢田神社の拝殿に机を設置し、その上に狛犬を置いて実施した。1人が投光器を使用して狛犬を照らし、もう1人がカメラで撮影した。撮影の際には、狛犬の周りを撮影者が回り、全方位からの写真を撮影した。これらの写真は後日、考古学研究室においてAgisoft社metashapeで解析し、3Dモデルを作成した（図5・6）。（角南博紀・平田有香）

3. 各像の概要

丹後半島には、石造狛犬の最初期の一例と考えられている宮津市籠神社石造狛犬（川勝1965ほか）と共通の構造や造形性、すなわち台座を有さず、まっすぐ伸ばした前肢に小さな後肢と扁平な頭部をそなえ、彫りが素朴であるという特徴を有する石造狛犬が多数分布していることが知られている。これらは丹後半島型石造狛犬（以下「丹後狛犬」）と呼称され、現在約30件の資料が確認されている（山下2023）。

今回調査を実施した矢田神社には2対の丹後狛犬が伝来しており、これらは1974年に京都府立丹後郷土資料館で実施された「ふるさとのこまいぬ」展で紹介されている。本稿では上記①②の1対をA像、③④の1対をB像とする。

A・Bいずれも一石から彫られており、台座は伴わない。石材は石英安山岩だと思われる。いずれも長期間風雨に曝されてきたとみえ、各部の摩耗が激しい。Aに目立った欠損はみられないが、B阿形に左前肢下半部、上顎左端部の欠損、体部左側中央の数センチ大の穴がみられ、

同呷形に左前肢つま先部内側、尾先端部に目立つ欠損がみられる。

A 呷形の頭部には角の表現がみられ、典型的な獅子狛犬の組み合わせである一方、B は阿呷ともに角はみられない。摩耗あるいは欠損の可能性もあり得るが、B は獅子 1 対の組み合わせということになり、獅子狛犬の 1 対であることが多い丹後狛犬にあっては例外的といえる。また A・B いずれも蹲踞の姿勢をとりつつも、面部は正面を見据えており、面部を拝者側に向ける例がほとんどである丹後狛犬では例外的である。

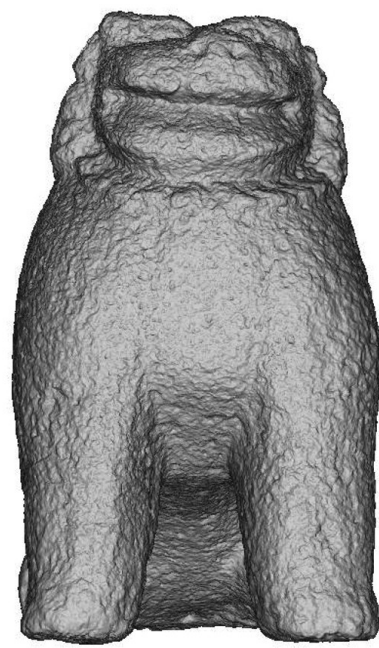
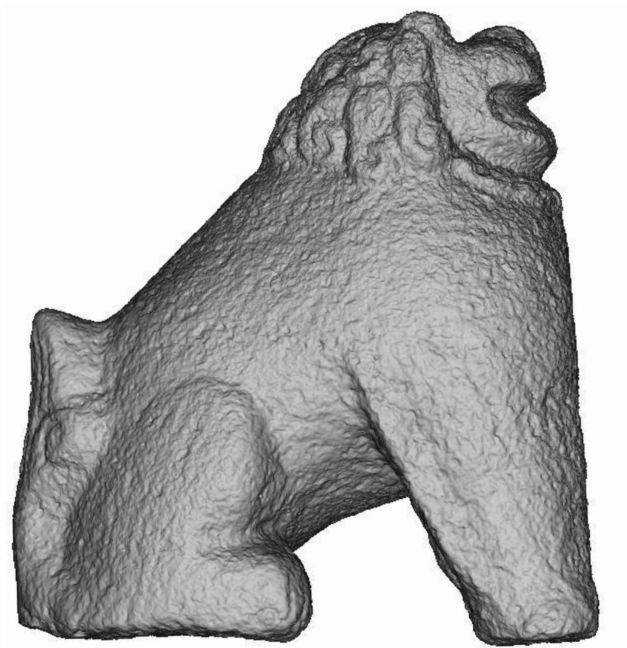
法量は、A は阿呷ともに像高約 25cm で、体長は阿形約 24cm、呷形が約 23cm、B は阿呷ともに像高約 25cm で、体長約 27cm である。

たてがみは A・B いずれも巻毛状である。またいずれも上段が右巻 2 本、左巻 2 本の計 4 本、下段が右巻 4 本、左巻 4 本の計 8 本である点が共通している。しかし A 呷形の巻毛の表現が、同阿形や B と比較してかなり緩やかである。同阿形は巻毛の彫りがはっきり残っている点から、これは摩耗の影響ではなく意図的な表現だと思われる。阿呷でたてがみの表現を区別するのは、籠神社石造狛犬にみられる特徴であるが、丹後狛犬の諸資料においては阿呷ともに巻毛とする例がほとんどであるため、これも例外的特徴といえる。顎鬚は、A は 9 から 10 本ほどの房が表現されており、B は一段盛り上げたところに 10 本ほどの筋を入れることで表現されている。いずれも彫りは簡素である。

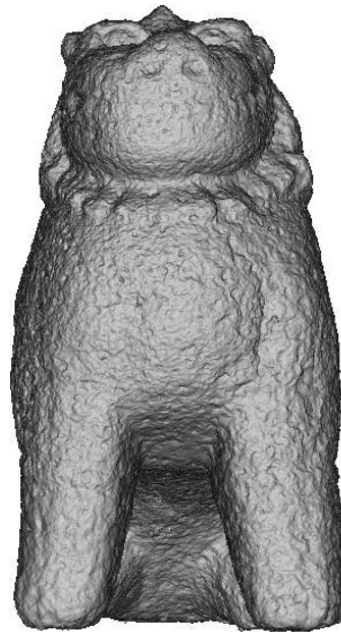
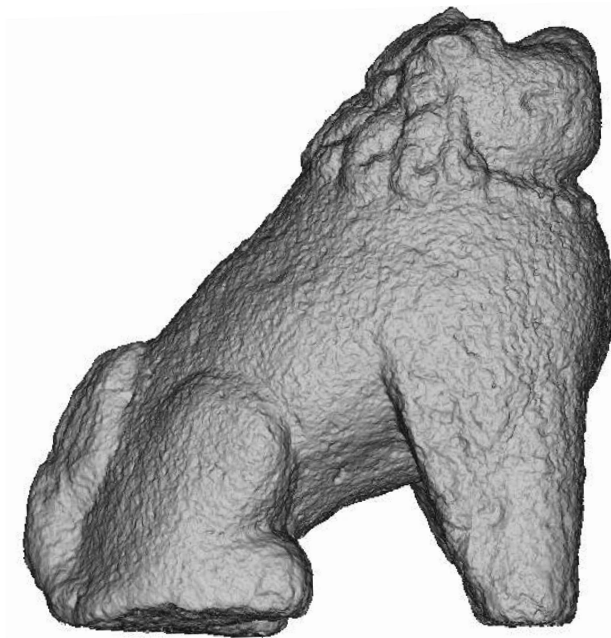
目は A・B いずれも彫りによって眼球が表現されている。眉の表現はいずれも確認できない。耳はいずれも摩耗が激しくはっきりとしないが、A 呷形の頭頂部左右に角や巻毛とは異なる突起物がみられる以外には立耳らしきものが確認できない。したがって、A は阿形が垂耳、呷形が立耳の組み合わせ、B は阿呷ともに垂耳の組み合わせと考えられる。丹後狛犬は籠神社像にならって阿呷で耳の形状を区別するものが多く、A はその典型にあるといえる。歯は、こちらも摩耗が激しいため判然としないが、A 呷形にわずかにギザギザ状の彫りで牙を表現している形跡がみられる以外には確認できない。ただし A・B の阿形の口腔内には、それぞれ舌と思われるものが浮き彫りにされているのが確認できる。

体部は、A・B いずれも両前肢後部に上になびいた足毛が確認できる。ただし、いずれにも丹後狛犬で多くみられる前肢部の縦筋や筋肉の表現は一切みられない。尾は、A 阿形は 8～9 本ほどの毛束が浮き彫りで表現され、そのうちの両端 1 本ずつが外側に巻く蕨手状になっており、同呷形は同様に 8 本ほどの毛束が浮き彫りで表現されているものの、蕨手状にはなっていない。B 阿形は 7 本の毛束が線刻で表現され、蕨手状ではない一方で、同呷形は 9 本ほどの毛束が線刻され、そのうちの両端 1 本ずつが外巻の蕨手状となっている。また股間の陽物・陰物は A・B いずれにも確認できない。

以上、矢田神社石造狛犬 2 対を詳細に観察した。面部を正面に向ける点や、前肢部に縦筋や筋肉の表現がない点など、丹後狛犬の諸資料と比較して、A・B ともに総じて非常に簡素な作りであることがわかる。丹後狛犬唯一の紀年銘資料である文和 4 年（1355）銘高森神社石造狛犬と比較しても、各部とも矢田神社の 2 対の方が簡素である。そのため A・B の製作年代は、いずれも文和 4 年よりかなり時代が下るものと考えられる。川勝（1965）、京都府立丹後郷土資料館（2007）、山下（2019）が簡素化の進んだ丹後狛犬の諸資料の製作年代を室町時代としていることを踏まえ、それらよりも簡素化がみられる A・B はいずれも室町時代の作



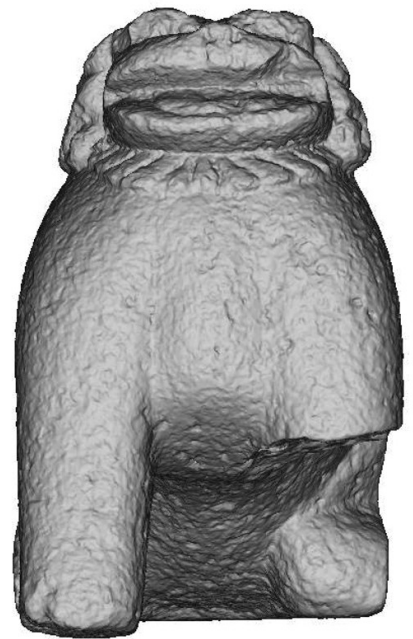
① A 像阿形



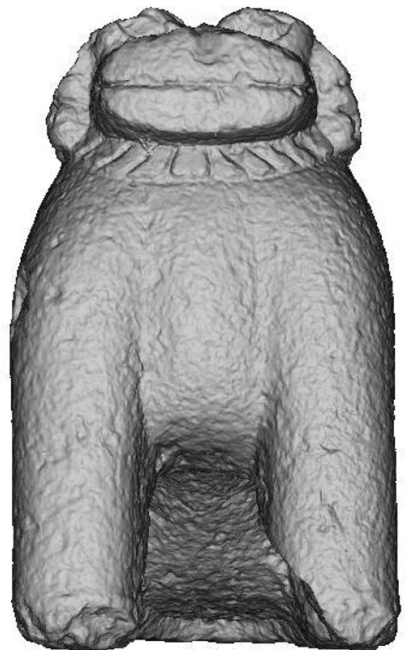
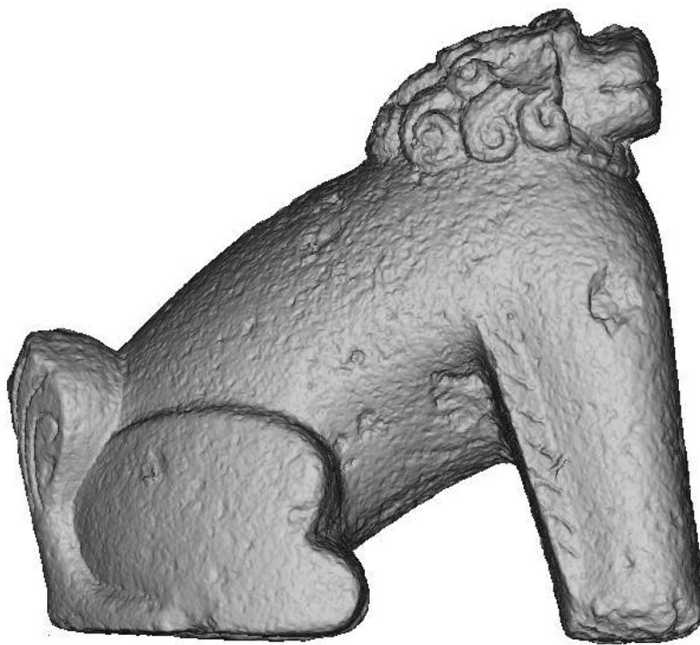
② A 像吽形



図5 矢田神社石造狛犬 3D 画像 (A 像) (S=1/3)



③ B 像阿形



④ B 像吽形

0 10cm

図6 矢田神社石造狛犬 3D 画像 (B 像) (S=1/3)

とするのが妥当であろう。A と B は製作年代に大きな隔たりはないと思われるが、A の方がやや彫りが丁寧である点や、阿吽でたてがみの表現を区別する点から、A の方が古態を残しているといえよう。(目黒力輝)

4. おわりに

石造狛犬は摩耗が激しく欠損している箇所もあったが、SfM を用いたことで目視ではわかりづらい細部も観察することができた。また写真では表現しきれない細部の造形や表現を任意のスケールで客観的に示すことができた点も SfM ならではの利点であり、大きな成果を得ることができたといえよう。石造狛犬研究のなかでも丹後狛犬は低調な分野であるが、今回の調査成果が丹後狛犬研究の一助となれば幸いである。(山内)

謝辞

今回の調査にあたって、仲原輝彦氏をはじめ多くの方々から格別のご高配を賜りました。末尾ではありませんが、厚く御礼申し上げます。

参考文献

嘉津山清 1982 「石造狛犬概説」『庭研』214

川勝政太郎 1965 「石造狛犬の系列」『史迹と美術』351

京都府立丹後郷土資料館（編）1974 『ふるさとのこまいぬ』京都府立丹後郷土資料館

京都府立丹後郷土資料館（編）2007 『春季企画展 木のこまいぬと石のこまいぬ』京都府立丹後郷土資料館

菱田哲郎・溝口泰久 2022 「京都府立大学文学部考古学研究室における三次元計測—現状と課題—」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科

山下立 2019 「狛犬百変化—ライオンか、犬か、それとも…—」『『動物美術館』開演！』滋賀県立安土城考古博物館

山下立 2022 「丹後半島型石造狛犬の成立と展開：二対の籠神社石造狛犬を中心に」『日本宗教文化史研究』51

山下立 2023 「藤社神社石造狛犬の特質と意義：丹後半島型石造狛犬普及の道筋」『史迹と美術』932

編集後記

余裕をもって仕事に取り組みたい。一つ仕事が終わる度に今度こそはと思うが、今回も果たせなかった。文字通りバタバタ。年末から長い師走が続いている。一つの救いは、春からのフィールドワークに始まり、冬の集報に終わるこの一連の営みが、10号を越え、府大歴史学科の伝統として根付きつつあること。フィールドをご提供いただいた関係各所のご厚意に深く感謝申し上げたい。

なお本書の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの合同実習メニューとして学部生が Adobe 社の InDesign を利用しておこなっているが、もちろんそのままでは本にはならない。一書にまとめるにあたって力を尽くしてくれた大学院生の頑張りにも深く感謝したい。(い)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第 11 号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2025 年 3 月 31 日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
